

フレーベル著

「リナは如何にして読み書きを學ぶか」(二)

—— 楽しく忙しく動く子供達のための美しい物語 ——

莊 司 雅 子 譯

丁度この時、父は旅行に行かなければならなかつた。で父は暫く家を留守にすると言つた。彼が出發するや否や、子供には以前の希望がまたもや現われて來た。「お母さん、私ほんとに書くことができるようになりたいの。そうすればお父さんにお手紙を送ることが出来るでしょう。」

「ええ、出来るようにして上げますとも。明日それに要るものを心配しておきましょう」と慈愛深く注意深い母は待ち焦れているリナに言つた。リナな喜びに満ちて急に飛び上り、母を抱き、そして歡聲をあげて叫んだ。

「ああ明日、ほんとに明日ね。」

翌日母と子供との共同の仕事に當てられた時間がまたやつて來た。リナは待ち切れず、母の部屋に急いで行つた。裁縫机で仕事していた母に、「お早うございます」と挨拶するや

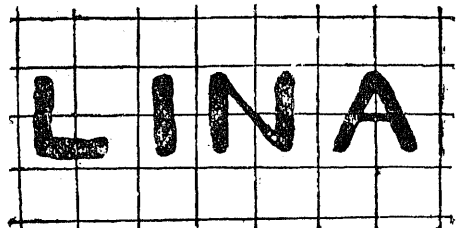
否なやリナの眼や頭や體は思はず部屋の真中にある机の方向いた。其處には、一つの美しい新しい枠に嵌められた石盤が、恰も嬉しそうに彼女を手摺きしているようだつた。その傍には石筆を嵌めたペンが置いてあつた。リナは急いで机の傍に立ち、嬉しそうに板を眺め、そしてそれを愛らしく撫で廻して見たり、全部の側を返して見たり、また石筆の入つたペンを指の間で廻して見たりした。

再び石盤をちつと見つめながら、それを持つて母の方へ走つて行つて叫んだ。「ごらんなさい。お母さん、石盤の上には美しい眞直な線と、澤山の小さい四角形とがあつてよ！」
「そうよ、リナちゃん、それはリナがらくに書けるためです」と母が言つた。瞬間リナは全くあわててしまい、そしてまるで夢から醒めたように、母の前に立つた。やつと言葉を見出

して言った。「ああ、お母さん、私はもうペンで紙の上に書けると思います。この板では私は手紙をお父さんに送ることは出来ません。」「ええそうですね。ペンとインクとでなくても、間もなく鉛筆で手紙をお父さんが歸つていらつしやる前に送られます。それには今までのように正しく注意深くしていなければなりませんよ。」

「おお、お母さんそうしますわ、きつとよ。」
「ではいらつしやい、すぐ始めましょう。」

母は未だ熱練していない小さい指がそのために不自然に曲けられたり、また壓迫されたりすることのないようにするため、先づ第一にリナに石盤の正しい持ち方を教えた。それから再び子供の名の「LINA」を棒片で机の上に並べさせ、そして二つの四角形の長さの直線で、板の上に置かれた棒片の長さを表わすことを示した。ちよつとした母の助けで、間もなくリナは自分の名前を石筆で十字形の板に書き入れた。僅かの練習で名前が完全に板の上に書かれた時、リナはそれを母に示した。「見て頂戴、お母さん、これでいいですか。」
「ああそれでいいです」と母は言った。子供は歡聲を擧げて言った。「おおきれいなね！ほんとにきれいなね！今度は『おとうさま』『おかあさま』『をぢさま』『愛するおとうさま』『愛するおかあさま』『愛するをぢさま』なども並べ、そして書いて見たいわ。そしてきつと私はちきお父さんにお手紙出せると思ふの。」



「餘りあせらないで進みなさいね。リナの望みはそのうちには聽かれるでせうから、餘り急ぎ過ぎてはいけないのよ。」

さてこの新しい力の進歩は、父と一緒に旅に出ていなかつた叔父に報告して叔父を喜ばせ、また叔父も全く心から喜んで、そのことに關心を有つてたということは、子供達の皆さんも想像出来ることでしょう。そして叔父は心の中でこんなことを考へてた。「リナは誠に熱心な子だ。母や父やそして自分をこんなにも喜ばせてくれる。自分も今度歸る時、何か喜ばして上げなくてはならない」と。そして彼は考えた通りに翌日實行した。

「お母さん！」彼女等の共同の仕事の時間が再びやつて來た時、リナは言った。「お母さん、今日お父さんに出すお手紙を試しただけでいいから、板の上に書かせて頂戴。そうすれば今度手紙に書く時、きつとらしくに書けるでしょうから。」母は言った。「いいとも、試して見ましようね。たとい上手に行かなくてもね。」

「お母さんが助けて下さつたら、きつと出来ますわ。」リナは歡聲を擧げた。

「ところで一體何を書きたいつもりなの」と母は尋ねた。リ

ナは暫くただ考えて、それから言った。「Lieber Vater
komme doch bald wieder (愛するお父さん、どうぞ早く
歸つて来て下さい)」

「一寸待つて」と母は言つた。「先づこれだけ全部書けるか
どうか見ましようね。始めの二つの言葉はリナにはすぐ書け
ますね。」リナは間もなく實際にそれを板の上に書いた。他
の四つの言葉もそれから更に(各々一つ一つゆつくりと)發
音させ、各々に文字があてられた。そして暫く後には手紙と
して板の上に次のやうに書かれた。

“LIEBER VATER, KOMME DOCH BALD WIEDER.”

(アイヌルオトウサマ、ハヤクカハツテキテクダサイ)

「お手紙は出来ましたか」と母は尋ねた。「いいえまだよ。
私はお父さんにもう板の上に書くことが出来たつていうこと
を言わなくてはならないの。」そして間もなくまた母の助け
でそれも書くことが出来た。

“ICH KANN SCHON AUF DIE TAFEL SCHREI-
BEN.”

(ワタクシハモウイタノウエニカクコトガデキマス。)

「はい、お手紙が出来ましてよ」とリナは言つた。「おおい
いえまだですよ」と母は答えた。「まだ何かが足りませんよ。
それ、何時かりナの名前から言葉の並べ方を習始めた時、お
母さんは、どの手紙にもなくてはならないものを言いました
ね。」リナは間もなく思ひついた。そして言つた。「さうさ
う、誰でも手紙を書く時は何時も自分の名前はその下に書か

なければならぬとおつしやいました。さう私もそうしま
せう。」

“DEINE LINA, (アナタノリナ)”

と彼女は更に手紙の下に書き、そして貴方にこの手紙を書き
ました、と一人に言つて見た。

それを書き上げて、リナは手紙を母に示したが、母は非常
に満足だつた。そこへ叔父が部屋にはいつて来た。リナはす
ぐ椅子から飛び降り、石盤をもつて叔父のところへ走つて行
き、そして嬉しさうに期待しながらそれを彼に差し出した。

「これはどう讀むかね？」と叔父は驚いて言つた。「お父
さんへの手紙がもう出来たの、それはいい。お父さんはきつ
とお喜びになるだろう。偉いね、リナよく出来たねつて。」そ
して一段聲を低くして「併し石盤の手紙では切手がどつさり
いるだらう。いやそれよりお父さんに届く前に壊れるかも知
れないな。」

悲しさうな聲でリナは答えた。「私お母さんに紙のことも
頼んだのよ。でもお母さんは先づ始めに試しに石盤の上に石
筆で書いて見なくてはいけないつておつしやつたの。だから
この手紙はただほんの試しだけなの。」

「一寸お待ち」と母はリナを慰めるように言つた。「石盤の
手紙はそのままにしておきましょう。リナの初めての試しと
してはほんとうによく出来ましたから、お母さんは明朝十字
形のはいつた紙と鉛筆とを買つて来て上げましょう。そうす
ればそれにこの手紙を寫して、ほんとに送りましようね。」

叔父は嬉しそうに笑いながら、洋服のむねかくしから捲いた一束の紙を取出して言った。「さあもう用意は出来てますよ。」そして子供の前に十字形のはいつた一枚の紙を開いて、色のついた鉛筆をその横に置いた。

全く生き返つたように、リナは机の前に行つて立つた。そして嬉しそうに彼父の前に置かれたものを眺めたり、叔父を眺めたりした。

叔父は言った。「それリナのだよ、リナ！ 明日それでお父さんにやる手紙を寫しなさい。」

「やつぱり叔父さんだけあるわ」と母は言った。「何と察しのいいことね！ 私もほんとにこんな優しい叔父さんがいらつしやるといいのに。」「ああ、」と叔父が答へた。「實際大人の欲しいものは大抵解かるが、子供の場合はなかなかさうはいかないですよ。」父の出發以來初めて過したほんとに愉快なお書だつた。というのとは一同の思ひ出に依つて、留守中の父が、幸福なささやかなこの集ひの中に如何にも生き生きと現はれてゐるかのようであつたから。

翌日リナにとつての最初の心配は、父への手紙を、叔父から貰つた美しい紙に色のついた鉛筆で出来るだけ念入りに寫すことだつた。

子供を喜ばせるために、實際に手紙は母の手で、すぐに近くのポストに投函された。

「ねえ」と手紙がポストに入れられた時、リナはいぶかしげに母に尋ねた。「お父さんは他の方のように私にも御返事を

下さるかしら。」

「さあどうかお母さんには解らないわね。お父さんは旅行中澤山の御用がおありだから、お父さんのなされるのをただお待ちする外ありませんの。」

さてリナはその日その日郵便到着日を待ち侘びたり、郵便配達夫を眺めたりして過した。遂に郵便配達夫が来た、母に宛てた手紙を持つて来た。正に父からの手紙だつた。リナは直ちに捺印と上書きとを見た。その中に自分のために何かはいつてゐないかしらと、非常な期待をもつて母が封を切る時その傍に立つた。

母が特に一緒に疊まれた一枚の紙を出して指の間に挟んだのを見た時よりリナの喜びは非常なものだつた。彼女は母が手紙を読み終るまでおとなしく待つてた。母は今度は子供に向つて言った。「お父さんはリナに宜しく傳へて下さい。そしてリナの可愛いお手紙ほんとに有難うつておつしやつてます。さあリナにも、お手紙を送つて下さいましたよ。ではね、お父さんがリナの手紙を読んで下さつたかどうか、そしてリナがその中に書いたことがお解かりになつたかどうか、自分で読んで見てごらんね。」こう言いながら母は今まで指の間に挟んで疊まれてあつた紙をリナに渡した。それは子供に宛てた父からの返事だつた。喜びと感謝の心とで子供は母の手からそれを受け取つた。眼に見える外部の生活を育むことに依つて、子供の内部にあるものを發展させようとしてゐるその母の手から。

子供はこの豫期しなかつた贈り物で喜びに満ち、そしてそれを持つて近くの窓際に行つた。それから暫くそれに就いて考へて見たり、較べて見たり、離して見たり、近寄せて見たりして、(「これは、彼女の眼の動きの早さが示している——)愛するこの紙を見つめた。それから母に向つて紙を高く擧げながら小踊りして叫んだ。「お母さん、私お父さんのお手紙讀めてよ」と。「ほんと? えらいわね。」母は答えた。「ではいらつしやい。そして讀んで聞かせて頂戴。」(父の手紙はリナと同じ方法で書かれていた。即ち眞直々な、直立せる大きなローマ文字、或ひは羅典大文字、即ち單純な眞直ぐな線と曲つた線とで、併し十字形なしに。

LEBE LINA

DEIN BRIEFCHEN HAT MIR VIEL FREUDE
GEMACHT, ABER KOMMEN KANN ICH JETZT
NOCH NICHT, WARUM — WIRD DIR DIE LIEBE
MUTTER SAGEN. MIR DAGEGEN MACHE DIE
FREUDE UND SCHREIBE RECHT BALD WIEDER.
DEIN DICH LIEBENDER VATER.

リナちゃん—

お前の手紙を受け取つてほんとに嬉しかつた。併し私はすぐ歸ることが出来ません。何故でしょうか。そのわけはお母さんが話して下さいましょう。ですからまた書いて喜ばせて下さいね。

お前を愛する父より。

「また書きましよう」と父の手紙ですつかり嬉しくなつてしまつた少女は心に決めて言つた。

「でもお母さん、お父さんはどうしてまだお歸りになれないの? ねえ、言つて頂戴。お父さんはお出かけの時、すぐ歸つて來るつて約束なすつたのよ。だのにもうこんなに長くたつてるのに。」

「そう? 優しいお父さんはまだそう長くお留守にしていらつしやらないでしよう!」と、いつくしみ深い母は言つた。「ただリナにはお父さんのお歸りが大へん遅いような氣がするだけです。だけどお母さんはこのことを知つてほんとうに嬉しいですよ。というのはリナはお父さんを慕つていますから。それはリナがお父さんを愛してゐるしです。」

「ええそうよ、お母さん。私は本當にとでもお母さんを愛してつよ。そしてお母さんと一緒に居るだけで嬉しいの。でもお父さんもほんとに愛してゐるわ。そしてお父さんが早くお歸りになればいいのにと思ひます。」

「お母さんはこのことを知つてほんとに嬉しいのです。でもねえ、私達はお父さんがお歸りになるまで、もう暫く辛抱しなくてはなりませんよ。」

「でもどうして? 言つて頂戴。お母さん。」

「リナ、お父さんがお出かけになる時、ときどきこんなことをおつしやつてたことを聞きませんでしたか? 『今日は用事が多くつて、早く歸れないから、食事は待たないでくれ』つて。ほんとに私達には餘り嬉しくないことです。でもお父

さんがたと遅くお歸りになつても、若し嬉しそうな眼差しで私達に會う時、それはお仕事を十分に立派にすまされたことを意味してきますから、お父さんのお歸りは私達には二重の喜びです。だからね、リナちゃん！ お父さんはきつと私達を喜ばせたいために、立派にすましてしまいたいお仕事をしていらつしやるでしょう。ですから私達もお父さんがお歸りになつた時に喜んで下さるような事を何かしましょうね。」

「ええ、ほんとにね、お母さん、しましょう、私のすることおつしやつて頂戴ね。」

「すぐ出来ることよ、リナちゃん。お父さんはリナからの手紙を欲しがつていらつしやるでしょう？ それを貰ふことはお父さんを喜ばせるつておつしやつてるでしょう。だからリナさへしようと思えばすぐお父さんを喜ばせてお上げ出来ますよ。」

「おお、ねえ、お母さん、今度お母さんがまたお父さんにお手紙をお出しになる時には言つて頂戴ね。その時一緒に私もお手紙入れて戴きたいの。」

「ああ二三日中に書かうと思つてますよ。それは私達をほんとは愛して下さるお父さんは、私達が皆無事だつてことを確かめるために、どんなにか私達からの度々の報告をお喜びでしょうから。では今度お母さんがまた書く時まで、よく書き方を勉強してごらん。さうすればお父さんはリナの手紙を見てもつと進歩したことがお解かりでしょうから。」

「きつとそうしましょう」と静かな併し確固たる意志の中に

深く自信をもつて少女は母に言つた。これがまたひどく母を喜ばせた。

この時以來リナのすべての仕事は、恰も眞剣と喜びと内的幸福との全く或る獨自な表現だつた。

次の手紙から父と娘との間にささやかな文通が始まつた。あとに残して來た家族の健康状態や生活に關する報告を受取りたいといふ旅行中の父の希望は、リナの手紙に多くの材料——家族と小さい書き手とが皆で考へるよりも一層多く——を與へることが出來た。このようにして彼等は愛する少女の能力と知識と力とは發展的な影響を與えた。こうして自分で考へたことや知つたことを短い手紙にして父を喜ばせると、(父の次々の返事は何時も新しい方向へ向けてくれるので)リナの熱心もまた高まり、そしてその熱心が増すにつれて彼女の勇氣も高まり、また熱心と勇氣が高まれば忍耐力も強くなり、このやうにして少女の些細な行爲がそれに相應した大きな完成へと進むことが出来る。子供はたとひ詩人や詩の言葉に就いて何も知らなくとも、吾々は詩人の次の言葉の眞理を深く感ずるのである。

「歡喜だ、歡喜が地球の大きな時計の齒車を走らす」

だが母と叔父とは、その詩や詩人や詩の眞理を知つてるから、彼等は小さな贈り物に依つて、少女の才能や意志や活動力、就中特にこの三つのものの働く結果を育んだり、力附けたりした。